「医療ルネサンス」－無痛分娩を考える－富永弁護士のコメント掲載記事を紹介！

2025.09.25

#CTG #分娩監視装置 #吸引分娩 #出産トラブル #無痛分娩

【医療専門】富永愛法律事務所　医師・弁護士　富永　愛　です。
出産のトラブル（赤ちゃんや妊婦さんの重篤な後遺症や死亡など）は当事務所にご相談ください。
実際に産婦人科の医療現場を経験した医師として、「これって本当に正しかったの？」「納得できないけど、どうしたらいいのか分からない」――そんな不安を抱えている方に、医学と法律の両方の視点から、安心できる一歩を踏み出していただけるようお手伝いします。

読売新聞「医療ルネサンス」で、2025年9月10日から全5回で掲載された「無痛分娩を考える」。

第2回、第3回では、当事務所で担当しているご家族の無痛分娩時の事故が紹介されました。
この事故では、無痛分娩時、クリニックの体制が手薄で、赤ちゃんの異変に気づかず、気づいた後も適切な対応がとられなかったことから、重症新生児仮死で搬送された赤ちゃんが約1ヵ月後に亡くなりました。

無痛分娩は通常の出産でも起こうるトラブルがさらに起こりやすいため、厳格な監視体制、十分な人手が必要です。

分娩機関を選ぶ際には、「病室や料理が充実しているか」などの表面的な部分に目が行きがちですが、取材の中でご再親も話しているとおり、十分な情報収集（常勤医師の人数や、無痛分娩であればJALAへの登録など）がとても大切です。

この事故について、無痛分娩は安全か？　妊婦さんやご家族に今、本当に知ってほしいことで詳しく解説していますので併せてお読みください。

医療ルネサンス　No.8584　無痛分娩を考える　2/5

体制手薄 誰も観察に来ず

「なぜ誰も来ないんだろう。大丈夫かな」。関東地方に住む女性（36）は昨夏、お産のためのクリニックの一室で不安になった。

陣痛が起こり、夜遅くに無痛分娩の麻酔が開始されたが、夜に子宮口が全開になってからも、夜勤の助産師はあまり様子を見に来なかった。胎児の心拍と高取締は、正常とわかる形を低い心拍数になり異常な波形を示していた。胎児の心拍が低い状況は改善しなかった。

医師が呼ばれ、緊急帝王切開として赤ちゃんの頭を吸引器で引っ張る「吸引」分娩で、気管挿管をしてようやく心拍数が安定してきた。自発呼吸はないまま、同病院に搬送されたが、過ぎていた。

井護士で、外科医でもある富永愛さん（大阪府）は、この夫婦の相談にどこまでも寄添えるのかと、立ち会っていた夫（40）は思ったのんだ。全身が判断の遅れや、母子の異変に気づかない点などに問題があったとする。

無痛分娩に対する不信感や悔しさを訴える女性

クリニックでは、医師が当日の夜勤体制を院内には他に複数の社産婦がいたものの、非常勤の産科医で、助産師が看護師がそれぞれ一人ずつ。当時は別の妊産婦の対応に追われていたが、遠隔の端末で女性のモニターを確認していたと説明した。富永さんは、緊急時に対応するには十分な体制だったと指摘する。

また、無痛分娩は引の機会も増えるとされる。吸引によるお産は赤ちゃんの頭の中で出血する「頭血腫」が30分ほどで到達し、対処が遅れれば血が足りなくなる可能性がある。富永さんは「無痛分娩で通常のお産で起こる問題が、より起きやすい。妊婦の経過をじっかり観察する必要がある」と語る。

「見た目はきれいなクリニック。こんなふうにすべてなんとかしてくれるのかと思っていた。本当に悔しい」。女性は声を詰まらせる。（この項続く）

2025年9月11日　読売新聞

医療ルネサンス　No.8585　無痛分娩を考える　3/5

安産のはずが……41日の命

九州地方のクリニックで昨年、出産した女性（36）は、無痛分娩の経過で異変に気づかれず、生まれた女児は仮死状態だった。

夫（40）は女児が別の病院に搬送される際、女児の容体を気にかけていた。出産後、クリニックの産科医は「三郎さんが言うほど心配するほどではないと説明したが、夫は動かず医師をとどまるよう説得した。

女児のために用意していた靴下。写真のように大切に飾られている

搬送先の病院で「重症の新生児仮死。こんな状態で送られてくるのは珍しい」と聞かされた。

入院した女児は多くの管につながれていた。約3000グラムだった体重はその後、2倍に増え、ぷくぷくとした姿は一見、健康そう見える。触れると、動かす反応をしたことあるが、一度、自力で呼吸することなく、生まれて41日で亡くなった。

「初は生きただけで安産だった言われていた」と女性は声を震わせた。

クリニックの側は非がないとの主張を繰り返すだけで、現在に至るまで納得のいく説明はない。出産後の血液検査で胎盤に約1キロの血の塊が見つかったが、因果関係を不明瞭。退院時には医師の説明もなかった。

夫は「無痛分娩のことは否定しないが、信頼に向き合ってほしかった」と不信感を募らせながらも、クリニックの外観から医師的なイメージにとらわれず、十分な情報収集が必要だったと感じている。

無痛分娩全般では、2014年に母親が脳内出血で亡くなったり、母子が重篤になったりするなど事例が相次いで明らかに。出産の態度で脳性まひとなった生後半年以降の赤ちゃんは、産科医療補償制度に、報告された09～19年の2457例のうち無痛分娩による分娩中に関連するのは43例。ただし、死に重例なとは補償の対象外で、ほかにも事故は起きている可能性がある。

安全な無痛体制の構築に向け、専門家は環境を整えるよう求めた。一定の技術水準を満たすことや必要な設備や医療機器を整備することなど、学会などに対し、定期的な講習会開催や人材育成のための研修プログラムの策定を促している。

関連学会と団体連絡協議会も設立し、医師向けの研修を実施している。こうした取り組みの結果、産科医が麻酔を担う医療機関も徐々に増えつつある。

今年10月には東京都で無痛分娩での出産に対する「無痛分娩」が始まり、産科医療補償制度の加入が義務化される。

「無痛分娩は、母子の安全を確保するための医療であるべきだ」と富永さんは「事故の教訓を生かし、起こた時に対応できないが、起こた時に対応できない母子の命にかかわる。産科医は麻酔の方法や緊急対応、麻酔科医は産の流れに、それぞれ習熟することが大切だと訴える。

2025年9月12日　読売新聞

この記事を書いた人（プロフィール）

富永愛法律事務所
医師・弁護士　富永　愛（大阪弁護士会所属）
弁護士事務所に勤務後、国立大学医学部を卒業。
外科医としての経験を活かし、医事紛争で弱い立場にある患者様やご遺族のために、医療専門の法律事務所を設立。
医療と法律の架け橋になれればと思っています。

一覧に戻る

Copyright © SANKAIRYO LABO